

巻頭言

試験研究における 「4つのクレド」

福井県農業試験場 たか高 おか岡 せい誠 いち一



私は、1983年に福井県農業試験場病理昆虫課に配属されて以来、通算で28年間、病害虫の研究に従事している。今日まで、イネばか苗病、ニホンザル、水稻湛水直播栽培における病害虫、フタスジヒメハムシ、ホウレンソウケナガコナダニ、斑点米カメムシ類等の防除技術に関する試験研究に携わってきた。これからを担う若手研究者の方の参考になればと思い、これまでの経験で私が考えてきたこと、感じてきたことを書いてみるので、一読いただければ幸いである。

クレド(Credo)とは、ラテン語で企業などのすべての社員が心がける信条や行動指針である。私は、病害虫の研究者は、農作物の生産基盤を支える縁の下の力持ちと考えており、これまで、現場からの要請を最優先に研究課題として取り上げてきた。目立たなくても農家の皆さんが喜んでくれる研究成果を出すことをモットーとしてきた。

そんな私が試験研究を行ううえで設定している「4つのクレド」を紹介する。

クレド①「現場重視」

病害虫の試験研究は、小規模なポット試験から大規模な圃場での実証試験まであり、試験内容によって使い分けが必要である。私は、圃場での実証試験を行う際は、農業試験場内ではなく、農家の圃場を借りて現地試験を行うようにしている。その際、処理区ごとに試験内容を記載した看板を立てると、圃場を提供してくれた農家だけでなく周囲の農家に強い関心を持たせることができる。そして、よい研究成果が出たときに、さらに地域ごとに現地モデル圃場を設けて実践して見せ、さらに研修会を開催し、一気に普及推進を図る。

開発した技術は、研究成果を公表して2年以内にどれだけ普及させるかが重要であると考えてるが、その技術の普及率が全体の1割の農家だけにとどまっても、その1割の農家が喜んでくれるのなら、それは立派な技術と評価してよい。それが現場を重視してきた証となる。

クレド②「挑戦」

新規の試験研究を課題化し、取り組むには、あらかじめ研究目標を明示しなければならないが、その目標をどの程度のレベルに設定するか迷うところである。私は、こういう場面では、自分の能力を踏まえて、背伸びしても手が届くかどうかギリギリのレベルが丁度よいと考えている。ギリギリで手が届かなければ、何とか到達しようと努力するからである。また、たとえ挑戦して失敗したとしても、そこから学ぶことも、その後の試験研究の大きな糧となる。

クレド③「創意工夫」

試験に用いる器具や資材は、理化学機器のカatalogから選ばなくても、日用品のほうが使いやすい場合がある。例えば、ホウレンソウケナガコナダニを濾し取るには、クッキングペーパーが適する。コナジラミ類を採取するときに用いる吸虫管も、乾電池式の医療用痰吸引機を用いれば、容易に捕獲することができる。工作好きの人なら、自分で改良する作業も楽しいかもしれない。また、ラッキョウのネダニ類を効率的に捕獲するためには、誘引源として市販のオニオンパウダーが役に立つが、ローストや食塩が添加されているなど加工されているものには誘引効果がない。東京へ出張した際、合羽橋道具街で無添加のオニオンパウダーを見つけたときに、感動したことを覚えている。

クレド④「効率化」

研究者も人間であり、体力と時間にも限界がある。また、働き方改革が叫ばれる一方、今後も試験研究にかかわる人員は削減されていくであろう。与えられた業務の中で、真剣に取り組む必要のあるものと、少々手抜きをしてもいいものを判断し、無駄な時間をかけないことが大切である。新規研究課題などを他者に説明、紹介する際には、いろいろな資料を作成するであろうが、それらの中に研究の出口(成果と波及効果)がイメージできるよう具体化されていることが重要である。研究の出口をイメージできていれば、その出口に向かって、どのような試験を行い、どのようなデータを揃えればよいかわかるからである。必要最小限の試験データだけを集めることが、究極の効率化といえよう。

最後に、経験豊富なベテラン研究者の方へ、お願いしたい。私は、これまでリーダー的立場で6人の新採用職員と仕事をしてきた。昔のグループリーダーは、若い人が見習ってくれるよう、自分が手本となり一生懸命頑張っている姿を見せることが、リーダーの宿命だと信じていたように思う。しかし、現在のリーダーの使命は、若い人たちが試験研究を効率的に進められるような環境を整えることが最も重要であると考えてる。現在の若い人たちは、意外と不器用な面があり、私が敷いた線路に乗せると上手く走ることができて、自分で線路を敷くことが苦手な人が多いように思う。

病害虫関係業務は、専門技術職のようなものである。若手研究者が自分で線路を敷いて走れるようになるまで育て、病害虫に関する伝承技術が代々引き継がれていくよう、今後ともご尽力いただきたいと切に願う。

(北陸病害虫研究会 会長)